



2008 平成20年

2

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市市民協働課へ

発行 ● 狛江市市民協働課 〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5 ☎ 3430-1111 FAX3430-6870 Email=wacco@city.komae.lg.jp 編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press 〒201-0012 狛江市中和泉 3-2-16 プランツベルツ 201 ☎ 3430-6617 FAX3430-6743 Email=wacco@k-press.net

1980年(昭和55年)ごろ



和泉多摩川商店街

ずらりと店が並び、買い物客でにぎわった

田園地帯だった狛江では、銀行町に商店が集まっていたが、調布など市外に買い物に行く人も多かった。しかし、戦後になって都市化が進むにつれて商店も駅前を中心に次第に増加した。昭和30年代に入ると毎年10%を越す勢いで人口が急増、街の各所に商店が次々と開店した。それでも商業施設は不足気味で、買い物客でごった返すなど、かつてない好況をみせ、56年には卸・小売



り・飲食店の数が1,000軒を超えた。商店街(会)も22年の銀行町を皮切りに30年代に入ると次々と組織され、40年代には8カ所にでき、さまざまな顧客サービスを競った。しかし、人口増加がにぶり、大型店の相次ぐ進出や消費行動の変化によって小売店を中心に次第にかげりが見え始めた。60年代に入って商店数も減少に転じ、商店街も現在、高齢化などの岐路にさしかかっている。

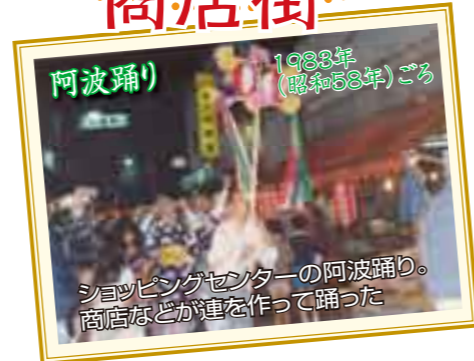
1日に数千人が買い物に

長谷川治男さん(73歳・中和泉)の話 都営狛江アパートと多摩川住宅の建設に合わせて住宅サービス協会が店舗用に開発・分譲した土地に家を建てて昭和42年に電器店を開業しました。うちは6、7軒目でしたが、10軒になったところで商店会をつくりました。野菜、肉、魚、菓子、豆腐、洋品、薬局、本、そうざい、電器の店があつてふだんの買い物ができる

て、「狛江にもネオンがついた」と話題になりました。当時は周りは畑ばかりで、国領(調布市)に市場がある程度。近くには店がなかったため、両方の団地から若いお母さんが乳母車を押して買い物にきました。店も次々と開店して、30年ぐらい前のピーク時には約90店と、狛江で一番の繁華街になりました。1日に数千人の人が来て、生鮮食品の店の前に長い行列ができ、自動車どころか自転車も通れないほどでした。ある肉屋さんは、天井からつるしたザルにお金を投げ込んでいたんですが、いくら売

街の発展につれ次々誕生

商店街



阿波踊り

1988年(昭和63年)ごろ

ショッピングセンターの阿波踊り。商店などが連を作つて踊った

狛江ショッピングセンター



1970年(昭和45年)

り上げがあるかわからないほどだと話してました。店主がみんな若かったし、景気も良かったので、ちんどん屋やキャラクターショーで宣伝したり、盆踊り、阿波踊り、祭のみこしの世話など、地域の行事も商店会が引き受けてました。いまから思うと夢のような話です。20年ぐらい前から、団地の主婦がパートに出るようになって客足が落ち始め、それと合わせてスーパーが開店してお客をとられ、閉店する店が出始めました。私が7代目の会長になって約20年ですが、状況は厳しいですね。現在約50店が加盟していますが、最初から残っているのはうちの店だけになりました。



慈恵第三病院 都営狛江アパート 狛江通り 狛江ショッピングセンター 大塚公園 多摩川住宅



和泉多摩川商店街 1954年(昭和29年)

駅東側の通りに店が建ち始めたが、まだ空き地がめだつ

ロマンスカーが臨時停車

土本義夫さん(86歳・東和泉)の話 登戸(川崎市多摩区)で、昭和21年から洋品店や理髪店などの商売を手がけていましたが、和泉多摩川駅に土地を買って、30年に洋品店とふとん屋を始めました。3、4人の商店主の親睦的な集まりだった「清流会」にも入りました。登戸の店より広がったので商売がしやすくなりましたが、周りは空き地が多く、道も舗装されていませんでした。街灯もないため夜は暗かったので、お客さんに来てもらうため、商店に呼びかけて1軒あたり1日5円ずつ積み立てて街灯を立てました。34年ごろ「奥様ボーナス」と名づけたスタンプを一部の店で始めましたが、都内でも2、3番目で珍しがられました。これは38年に「マダムスタンプ」と名前



モール化完成 1997年(平成9年)



スーパー開店 1960年(昭和35年)

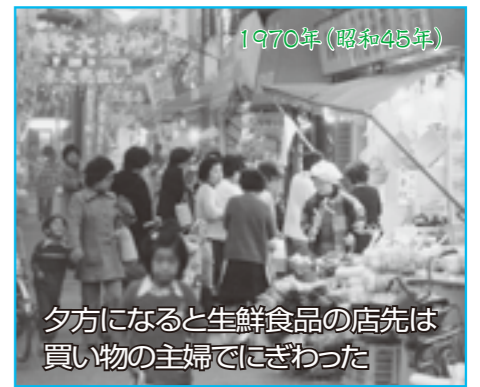
都心でも珍しかったセルフサービス方式のスーパーには多くの客が詰めかけた

を変えて、全部の商店が扱うようになりまし。景品には箱根1泊旅行もあり、すごい人気でした。ロマンスカーを和泉多摩川駅に停車させたことも3回ありました。、3両貸し切りでお客さんと商店会の役員

200人ぐらいで出かけました。ロマンスカーを停めるため、運輸省まで行きましたよ。30年代後半から40年代にかけて道の両側に商店が次々と建ち、業種も増え、なんでもそろようになりました。最盛期は40年代から50年代にかけてで、駅の両側に120軒ぐらいの店がありました。ある魚屋さんは、忙し過ぎて売り上げを数えていられないため、タンスに入れておき、毎朝銀行員が数えにやってくるほどでした。その後、世田谷通りが現在の道に変わったときと和泉多摩川通りができたときに、その影響で客の数が減りました。36年ごろに清流会を「和泉多摩川清流会」と名前を変え、会長になりました。平成4年に「和泉多摩川商店街振興組合」と改称し法人化しました。9年に商店街をカラー舗装して街路灯を新装するなどのモール化事業が完成したのを機に引退しましたが、話をまとめるのに苦労しました。

5の日はラッシュ並みの混雑

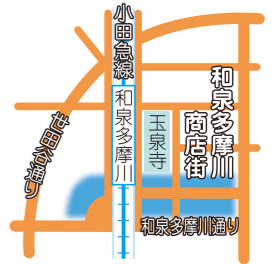
太田実さん(85歳・東和泉)の話 昭和29年に都内から和泉多摩川駅の近くに引越してきました。当時、近所にあった商店は9軒でした。私は会社員でしたが、新しい商店が次々と建ち始めたので、地の利を生かして商売を始めようと研究し、



1970年(昭和45年)

夕方になると生鮮食品の店先は買い物の主婦でにぎわった

34年にお茶と瀬戸物を扱う店を開店しました。開店当時は妻(和子さん)がやっていたが、客が増え仕入れなどが大変になり、36年に会社を辞め商売に専念しました。そのころ、土本さんに誘われ、「清流会」に入りました。その後は、副会長として土本さんと一緒に東京周辺の商店会へ見学に行ったり、スタンプ会を始めたりしました。阿波踊りを催すため、仕事が終わった後に役員は夜遅くまで多摩川で太鼓の練習や玉泉寺の境内で踊りの練習をしたこともあります。商店街の周りの人口もだんだん増え、猪方や駒井町からも買い物客が来て、毎月5のつく日の売り出し日は、ラッシュアワー並みの混雑でした。暮れには、猪方からリヤカーを引いて買い出しに来る一家もいました。私の店は、大みそかは年賀のあいさつ用の商品を求める人で夜遅くまで忙しく、除夜の鐘を聞くころに銀行員が売り上げを集めにきたり、店の掃除が終わる深夜2時ごろに初もうで客が帰ってくるなんてことも何度かありましたね。



行きましたが、市内はもちろん、都心でもまだスーパーが珍しいころで、売る方も買う方もとまどったそうです。店には昭和初期の木製レジ(写真上)が残っています。



写真提供・取材協力=長谷川治男、土本義夫、太田実、谷田部尚三(故人)、谷田部秀一、浮岳堯侃(順不同・敬称略) 資料=「萌動」「狛江の民俗IV」(狛江市)